

CAMPUS HEALTH

2013.5

50 (2)

特集：キャンパスにおける感染症の管理
論文集・協会彙報



Japan University Health Association

CAMPUS HEALTH 50 (2)

特集・論文集・協会彙報

公益社団法人 全国大学保健管理協会



目 次

巻頭言

知ることの安心	渡 辺 厚	1
---------	-------	---

特集 《キャンパスにおける感染症の管理》

大学での麻疹・風疹・水痘・ムンプスの集団発生を予防するために必要な知識	多 屋 馨 子	3
地域における感染症対策と大学生	越 田 理 恵	9
附属学校園を持つ総合教育機関における感染症の総合的な管理	森 正 明	15
キャンパス内の感染症流行の管理	真 島 一 郎ほか	21
学生実習・サークル活動と感染症対策	岸 川 秀 樹ほか	26
海外渡航時の予防接種－途上国から先進国まで－	中 野 貴 司	32
海外から留学生を受け入れるときの健康診断と証明書	鈴 木 眞 理ほか	38
若者に多い性（行為媒介）感染（STI）とその予防法	笹 川 寿 之	44

全国大学保健管理研究集会優秀演題論文

千葉大学における胸部 X 線検査省略の現状調査 第 2 報	生 稻 直 美ほか	51
青年期成人に適した新規食行動質問表の開発	山 崎 浩 則ほか	57
随時尿中ナトリウム測定による減塩指導の効果	戸 田 寛 子ほか	63
大学生に対する参加型喫煙防止教育の長期有用性について	川 崎 詔 子ほか	68
修学サポートグループの有効性についての検討－学生支援モデルとの関連から－	酒 井 渉ほか	74
新入生不安尺度の作成	井 上 光 一ほか	79
発達障害と二次的障害を抱える学生の進路状況	岡 本 百 合ほか	85
仮設住宅における仙台大学健康支援の効果について	鈴 木 眞 理子ほか	91
摂食障害と向き合う－空洞化したモラトリアムを生きる－	細 田 憲 一	97
学生相談室からの情報提供による連携活動－より充実した学生サポート体制を目指して－	山 本 洋 子ほか	103

一般投稿論文

学生向け健康手帳の活用の試み	中 込 裕 美ほか	109
生活時間調査からみた大学生の肥満予防指導への一考察	前 堀 洋 子ほか	113
子宮頸がんについてのアンケート調査	永 井 真由美ほか	119
大学生のインターネット依存と疲労自覚症状に関する実態調査	松 本 さゆりほか	125

薬学部実務実習に際しての感染予防対策……………	作田 恭子ほか	… 131
高等教育の障害学生支援における体系的支援と個別支援－保健管理施設の役割と連携について－	吉原 正治ほか	… 137
自閉症スペクトラムのある学生への就労支援－学内インターンシップの試み－	北添 紀子ほか	… 143
メンタルヘルス不調で休業した看護職の復職支援……………	大西 勝ほか	… 149
4種感染症における抗体陽性率の年次推移について……………	岩見 文博ほか	… 155
薬学部新入生における各種ワクチン接種率の推移と第4期MR混合ワクチン接種の効果	小森 由美子ほか	… 161
基本4感染症抗体価の在学中の増減－ムンプス抗体陰性者は何故多いのか－	小野 真一ほか	… 167
アンケート調査による感染症の推定抗体保有率……………	山本 明子ほか	… 173
学生定期健康診断における予約制導入により向上した自動計測システムの効果について	神主 京子ほか	… 179
WEB-DB モジュール型自動健診システムの試作－省力化とサービスの向上を目指して－	宮崎 英一ほか	… 185
フィットネスに関する健康行動尺度の開発と信頼性・妥当性の検討	小川 さやかほか	… 191
医療福祉系A大学での大麻等違法薬物に関する実態調査……………	高橋 佐和子ほか	… 197
上越教育大学における“子育て支援の会”の特徴と今後の課題……………	高橋 靖子ほか	… 203
東日本大震災後の都内薬科大学学生の心身への影響……………	山口 志津子ほか	… 209
自転車事故に関する調査報告－山梨大学甲府キャンパスにおける 自転車事故防止に向けた取り組み－……………	宮村 季浩ほか	… 215
報告・技法紹介・特別寄稿		
新入生のメンタルヘルス対策－健康診断における全員面接の導入－	Peter Bernickほか	… 221
学生の精神保健相談における外在化を用いたナラティブセラピーの適用 －その技法と効果について－……………	布施 泰子ほか	… 227
英国大学保健管理協会（Student Health Association）第64回年次集会に参加して	山本 眞由美	… 231
ACHA 2012 Annual Meeting in Chicago で Student Health Care on Campuses in Japan を発表して	足立 由美ほか	… 236
中国滞在中の医療トラブルの実態と対策……………	田中 健一ほか	… 241

平成24年度事業報告	
第50回（平成24年度）全国大学保健管理研究集会概要	247
平成24年度 地方部会事業報告	260
平成25年度事業計画	
第51回（平成25年度）全国大学保健管理研究集会ご案内	273
平成25年度地方部会役職者および活動予定	274
理事・監事・評議員名簿	277
会員名簿	280
協会からのお知らせ	
会議報告, 会議予定	286
協会この1年	287
機関誌編集委員会からのお知らせ	289
CAMPUS HEALTH (2) 投稿規定	290
あとがき	293

知ることの安心

公益社団法人全国大学保健管理協会理事 渡辺 厚
福島大学保健管理センター教授

あの日から2年が過ぎた。断水で水を極端に節約し、ガソリン不足でガソリンスタンドに続く長蛇の列に並び、高い空間放射線量のために出来るだけ外出を控えたのが遠い過去のことのように見える。キャンパス内は学生達が笑顔で闊歩し、町を歩けば女子高生達が談笑して行き交う。震災前と何も変わらないように見える。

しかし、幹線道路は土や建設機械を積んだ大型トラックが頻繁に行き交い、小路に入ると道はあちらこちら掘り返されている。家々の屋根や庭には建設作業員の格好をした人が目立つ。除染の人たちであり、道や家を除染している光景である。春の日に照らされて何の変哲もない空間に線量計をおいてみると、針がフツと大きく振れる。目には見えず、感じることも出来ないが、そこには放射能が相当量ばらまかれている。震災前とは全く別の世界になっている。そういえば、天気がよいにもかかわらず、洗濯物を外に干している家は少ない。スーパーでは箱入りミネラルウォーターが山積みになっており、売れ行きがよい。もはや放射性物質の飛散はなく、水道水に放射能が含まれていないことは分かっているが、人々の生活はなかなか元に戻れない。

福島市内の空間放射線量は1時間あたり0.1から1.0マイクロシーベルト程度と地域によりかなりの幅があるが、筆者が実際の生活をしながらの積算線量を測ると年間被曝線量は1.3ミリシーベルト程度である。ICRP（国際放射線防護委員会）が勧告する一般人の年間被曝許容線量1ミリシーベルト以下とはいかないが、健康にはほとんど影響を及ぼさないレベルである。にもかかわらず、生活を元に戻せない。心の構成要素である知・情・意のうちの「知」では分かっていることであるが、「情」が許さず時に暴走を始める。これには原発事故により平常の生活を奪われたという憤りが色濃く混じっており、時に放射線が平常時の数倍も我が身に突き刺さりDNAが傷つけられているという思いにいたたまれなくなることがある。もちろん、人間の持っている強力な修復機能によりこの程度の傷は問題なく修復されることは分かっているのだが。ある聡明なご婦人から、頭では分かっているのに、心が許さない、どうしたらよろしいかと相談を受けたことがあり、口には出さないが自分もそうであると独り合点したことがある。

一人歩きしてしまった「情」の暴走を止めるのはやはり「知」であろうか。先日、ホール・ボディ・カウンターの検査を受けてきた。内部被曝の検査である。子供達や若い人達を優先的に検査してきたが順調に推移しているので、我々の年代も調べてくれるという。この歳で内部被曝を気にすることもなし、食事も気をつけているので検査の必要はないと思いながらも受けてきた。どんな検査か経験しておきたいことと、一抹の不安を払拭するためである。検査は柱の陰に隠れるような姿勢で2分ほど立っているだけですんだ。結果は1ヶ月ほどして送られてくるとのことである。気にしていないといいながらも検査したことの安心感は大きい。ホール・ボディ・カウンター検査とは別に、福島県では子供達の甲状腺検査も行っている。若いお母さん方にとっては、我が子の甲状腺に放射能が

及ぼす影響は大変な心配事である。その結果は、約4割の子供達に小さな結節や嚢胞が見つかったとのことで、すわ、放射能の影響かと心配したが、その後、福島県以外のところでの調査でも同程度の所見が見られたとの結果が出て皆安堵したところである。正確な情報が不安やパニックを押さえ安心をもたらす。

さて、本号の特集テーマは「キャンパスにおける感染症の管理」である。人生で最も健康な年代を生きている学生達にとって健康を害する最大の原因の一つは感染症である。インフルエンザや感染性胃腸炎などすぐ身近にあるものから、グローバルな時代に海外からもたらされる輸入感染症、いつかは分からないが発生が確実視されている新型インフルエンザ、最近国内発生が確認されまだ詳細がはっきりしないSFTS（重症熱性血小板減少症候群）など枚挙にいとまがない。治療や予防をどうするか、日々対応を迫られているところであるが、放射能の対応と同様、敵を知れば百戦危うからず。強力な執筆陣による正確な知識の提供を受け、心配を安心に変えていけるものと信じている。